

生物劣化研究会・木質文化財研究会

2012秋季合同シンポジウム“木質文化財を虫菌害から守るために”

生物劣化研究会代表幹事：

奈良県森林技術センター 酒井温子

生物劣化研究会幹事（会計担当）：

(株)コシイプレザービング 前田恵史

木質文化財研究会代表幹事：

奈良文化財研究所 高妻洋成

“木質文化財を虫菌害から守るために”をテーマとしたシンポジウムを、平成24年9月28日金曜日、京都大学宇治キャンパス・木質ホールにて開催いたしました。これは、恒例の生物劣化研究会の秋季講演会を、昨年度発足した木質文化財研究会との共催企画として行ったものです。今回のシンポジウムでは、文化財保存科学に関わる研究機関、木質科学を専門とする大学、そして薬剤開発に関わる企業から、それぞれの立場で、文化財の虫菌害の現状と保存対策、被害状態の正確な評価方法、そして文化財に使用されている薬剤について、話題提供をいただきました。

シンポジウム開始に先立ち、先般ご逝去された高橋旨象・京都大学名誉教授の御冥福をお祈りし、京都大学生存圏研究所・吉村剛教授のご発声で参加者一同起立し、黙祷をささげました。

講演会では、はじめに、独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 木川りか氏から、「木質文化財の虫菌害－現状と対策－」と題して、屋外の自然環境の中で維持保存されている大型文化財である木造建築の虫菌害について現状報告がなされました。日光社寺における虫菌害の調査事例を通じて、シバンムシ被害の現状と対策、また今後の課題として、修理時に再利用する部材の燻蒸や、新たな虫の侵入を防ぐ工夫が必要であると述べられました。

また、財団法人元興寺文化財研究所 植田直見氏からは、「虫菌害による被害と修復－仏像・絵馬・民具について－」と題して、屋外・室内の様々な条件下で保存管理されている比較的小型の文化財である仏像・絵馬・民具の虫害について、被害事例と保存修復方法が紹介されました。とくに、信仰の対象である仏像や、異素材の組み合わせの多い民具について、ガス燻蒸、樹脂による補強、防腐防蟻剤の塗布等の方法を具体的に説明していただきました。

続いて、虫菌害の診断方法として、京都大学大学院農学研究科 築瀬佳之氏から、「木造建築物の被害調査」と題して、目視・触診・打診による一次診断、ピロディンやレジストグラフ、AEなどの機器による二次診断について、詳細な方法とこれらを組み合わせた被害調査の事例が紹介されました。

その後、薬剤開発企業の方々のご講演に先立ち、生物劣化研究会 代表幹事 酒井温子氏により、現行の文化財虫菌害防除薬剤の認定について説明がありました。引き続き、この認定薬剤

の中から選ばれた3薬剤について、「木質文化財への薬剤の適用」と題して、三井化学アグロ株式会社 松岡宏明氏から燻蒸剤について、日本エンバイロケミカルズ株式会社 吉田慎治氏からは防腐防蟻剤について、イカリ消毒株式会社 川越和四氏からはシロアリ駆除剤（ベイト法）について、それぞれの薬剤の特徴と施工事例について説明がありました。

講演後のパネルディスカッションは、酒井氏が司会役となり、6名の講師陣と木質文化財研究会 代表幹事 高妻洋成氏で進められました。

あらかじめ参加者から提出された質問用紙を活用し、サーモグラフィを用いた劣化診断の可能性、シバンムシ・シロアリ以外による生物被害、たとえばクマバチ・ドロバチなどの虫害やタヌキ、ハクビシン、アライグマなど小動物による建造物被害、ベイト法によるヤマトシロアリの具体的な駆除方法、保存処理に用いる樹脂の劣化等について、パネラーの方々はじめ公益財団法人文化財虫害研究所 小峰幸夫氏のコメントも受けながら、活発な意見交換が行われました。

特に、新築建造物にはあまり見られない虫菌害が古い建造物に多く認められる事実から、より長く文化財を維持するためには、劣化の早期発見・被害診断、劣化の遅延手段、虫菌害の駆除方法などに対して、それぞれの専門家間の連携が不可欠であることがあらためて浮き彫りになりました。また、文化財の修理には多額のお金と手間と時間がかかることから、被害を予防・軽減する工夫が重要であるものの、現在の文化庁等からの補助金制度は、保存修理には適用されても、日常の維持管理・メンテナンスには補助金が付かないことも課題として指摘されました。

“木質文化財を虫菌害から守るために”をテーマとしたシンポジウムは、文化財の生物被害に対する調査研究・防除対策などの課題について、立場の異なる国立研究機関、財団法人、そして民間企業、また木材関係者と文化財関係者が一堂に会し情報共有するという、これまであまり見られなかった取り組みとして、講師はじめ参加者の方から、大変好評をいただくことができました。このシンポジウムをひとつのきっかけとして、生物劣化関係者と文化財関係者間に様々な交流が生まれ、相互に益々発展することを期待したいと思います。

最後になりましたが、シンポジウム開催にあたり、協賛いただきました公益社団法人日本木材保存協会、後援頂きました公益社団法人日本木材加工技術協会の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。

文責・木質文化財研究会幹事 横山 操